

# 金沢大学タウンミーティング in 小松

## 「世界とつながるハーモニーシティを目指して」

～ものづくり、多文化共生、環境再生をテーマに～



和田慎司・小松市長



中村信一・金沢大学長

地域との対話を通じて連携を探るため、金沢大学は12月3日、小松市と共催で「金沢大学タウンミーティングin小松」を開きました。大学ではタウンミーティングを平成14年度から石川県内で毎年連続して開催しており、今回で11回目。会場となった県こまつ芸術劇場うららには市民400人余りが訪れ、「ものづくり」「多文化共生」「環境再生」をテーマに考えました。(文責・地域連携推進センター宇野文夫)

2011年12月3日

県こまつ芸術劇場うららに500人集う

産学官連携で世界の  
小松を発信：中村学長

今回は金沢大学と小松市が協働で開催するため実行委員会(実行委員長：中村浩二教授・学長補佐)を結成し準備を進めてきました。タウンミーティングのタイトルは「世界とつながるハーモニーシティをめざして～ものづくり、多文化共生、環境再生をテーマに～」。同市の将来ビジョンをタイトルに生かしました。開会に当たり、中村信一学長が「産学官連携を通じて、世界の小松をともに発信していきたい」とあいさつ。和田慎司市長も「未来につながる小松を大学といっしょに歩んでいきたい」と期待を込めました。

- あいさつ (金沢大学長 中村信一、小松市長 和田慎司)
- 趣旨説明 (金沢大学学長補佐、タウンミーティング in 小松 実行委員会委員長 中村浩二)
- 基調講演1 「コマツと地元の協力企業によるものづくりについて」  
(コマツ 調達本部粟津調達部長 御澤俊明)  
(コマツ 調達本部粟津調達部調達管理課長 加端千香子)
- 基調講演2 「共に目指そう、世界につながる“ものづくり”小松」  
(金沢大学理事 長野 勇)
- 事例報告
  - ①小松市の多文化共生について  
(小松市国際交流協会事務局長 綾 美寿恵)
  - ②小松市の環境再生の取り組みに向けて  
(金沢大学環日本海域環境研究センター教授 長尾誠也)

未来につながる小松を  
大学と共に：和田市長

中村浩二教授・学長  
補佐が趣旨説明



長野勇理事・副学長  
による基調講演



コマツ調達本部  
粟津調達部の  
御澤俊明部長(左)  
と加端千賀子課  
長が基調講演



基調講演では、コマツ調達本部粟津調達部の御澤俊明部長と加端千賀子課長が「コマツと地元の協力企業によるものづくりについて」と題して、サプライヤー(外注企業)との後継者教育、生産技術の向上、QC(品質管理)活動などコマツ方式と呼ばれる取り組みについて紹介しました。長野勇金沢大学理事・副学長は「共に目指そう、世界につながる“ものづくり(作り、創り)”小松」と題して、里山雑木からエタノール生産プロジェクトや小松市の企業と連携で人工衛星の製作など夢のある「ものづくり」について提案しました。事例報告では、綾美寿恵小松市国際交流協会事務局長が多文化共生について、また、長尾誠也教授が大学と市、環境保護団体の3者の連携による木場潟の環境再生に向けた取り組みを提案しました。



綾美寿恵事務局長



長尾誠也教授



## 3テーマで分科会

- 分科会 A 「ものづくり」(座長 金沢大学理工研究域機械工学系教授 岩田佳雄)  
分科会 B 「多文化共生」(座長 金沢大学留学生センター長 志村 恵)  
分科会 C 「環境再生」(座長 金沢大学地域連携推進センター特任教授 川島平一)



分科会は「ものづくり」「多文化共生」「環境再生」をテーマに市民を交えて活発な意見交換が行われました。

### 分科会A「ものづくり」…3つの事例から学ぶ

分科会A「ものづくり」では、3つのテーマで、小松市内の企業からの発表がありました。小松電子株式会社商品部の福村康和MD課長が「産学官連携で築く新規関連事業の推進」と題して、金沢大学との共同研究などを経て商品化した超純水製造装置について紹介しました。また、ライオンパワー株式会社の高瀬政明会長は「医療器・治療器の研究開発についての取り組み」と題して、「企業に

とって20%の難しさは克服できる。そのとき、人を頼らぬ強さより、人にも頼ることの強さを知るべきと社員に話し、大学や研究機関を聞き取りに歩いている」と話しました。小松共栄工業協同組合の東光久事務局長は「グループエコステージ導入でともに組織の生き残りを」と題して発表しました。

### 分科会B「多文化共生」…理解し合う環境を

分科会B「多文化共生」では、在住の外国人を交えて話し合いが行われました。小松市国際交流員のハファエレ・リマさん(ブラジル出身)は「在住の外国人と小松市民の架け橋となり、お互い触れ合い、理解を深め楽しくともに暮らしたい」と述べ、その前提条件としてお互いのアイデンティティー(帰属意識)を認め合う価値観の多様性を育みたいと話しました。また、参加者から、ドイツの多文化共生の政策について質問があり、座長の志村恵教授は「ドイツはこれまでの分化政策を見直し、統合政策へと舵(かじ)を切っている。そのため年



少者へのドイツ語教育に力を入れている」と答えました。また、在住外国人の子弟のための進路ガイダンスの取り組みについて市国際交流協会の綾事務局長が説明をしました。小松市民の多文化理解を進めるために金沢大学の留学生による学校授業を広めてほしいとの要望もありました。



### 分科会C「環境再生」…木場潟の浄化を

分科会C「環境再生」では、木場潟の環境再生がテーマとなりました。木場潟は小松市民に愛され、同潟を中心とする公園は平成21年度には延べ54万人が足を運んでいます。平成2年に汚染度で全国ワースト2になり、その後改善されたとはいえ、COD(化学的酸素要求量)などの汚染度は高止まりしています。分科会では、水質浄化と生態系の再生を目標に結成した「木場潟再生プロジェクト」リーダーの土田準さんとNPO法人チームリアルこまつ代表(里山自然学校こまつ



### 意見交換会

#### 包括連携協定で パートナーシップをより強く

午後4時30分から立食形式による意見交換会が開かれました。和田市長のあいさつの後、乾杯のあいさつに立った櫻井勝理事・副学長は「来年早々に小松市と金沢大学の間で包括連携協定を結び、さらにパートナーシップを強めていきたい」と述べました。

滝ヶ原塾長)の舟津秀一郎さんが事例報告をしました。木場潟の汚染について、長尾誠也教授は、生活排水や工場排水などの環境改善が進んでいるにも関わらずCODが高止まりする原因の究明には、湖底堆積物の原因関与についての調査研究が欠かせないと問題提起しました。廃校を活用した「里山自然学校こまつ滝ヶ原」の取り組みについて、舟津氏は、地域資源を掘り起こすために、今月12月11日には鞍掛山周辺の石と自然を考える講演会と、石の魅力を知ってもらうための鑑定会を催すイベントについて紹介しました。